



# 秋晴れのなかごみフェスタ 2009 開催

今年のはちドリ教室はエコレジの大学生たちと一緒にやりました



2009年10月4日、快晴にめぐまれた日曜日、町田市のリサイクル文化センターを会場にごみフェスタがおこなわれました。真夏に戻ったような暑さにもかかわらず、来場者数は12,000人を越え、各種団体による催しや発表、販売に会場は大賑わいでした。13時30分からステージで始まったのは黒津一子さんたちによるハチドリ教室。ハチドリのエピソード紹介と町田のごみの現状を通じて、地球温暖化をとめるために暮らしのなかでできることを紹介しました。黒津さんの呼びかけでステージにあがった子どもたちがごみの分別ゲームに挑戦する一幕も。挑戦者には記念品としてエコバッグが進呈されました。今回のハチドリ教室はアシスタントとして桜美林大学の環境団体、エコレジの学生さんも一緒に参加しています(ごみフェスタの詳細は5ページにてお伝えします)。

## 第75号目次

秋晴れのなかごみフェスタ 2009 開催	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(十)	渋谷 謙三 2
ごみフェスタ 2009 みどころダイジェスト	5
雨の茶の花忌——詩人、八木重吉の命日に相原を訪ねました	向谷有加 6
事務局だより・編集後記	8

渋谷 謙三

■都市政策のエポック・メイキングとしての団地白書

1970年(昭和45年)の大下革新市政誕生の半年後に完成した「団地白書」は、東京都南端の生まれたての町田市で、自民党から社会党市長への政権交代劇による単なる政策転換に過ぎないものと見られていたが、その中身が市議会での質疑やマスコミ報道によって次第に明るみになるに従い、あるいは市長が国会に証人喚問されたり、また白書の作成に伴う「宅地開発指導要綱の制定」、さらには長期計画の作成方針が新大下市政の「三段ロケット」などと喧伝されるに及んで、これは単なる政策と言うより、時代を象徴する画期的なエポック・メイキングだったのではないかという認識が強くなってきて、直接の作業責任者を務めた私自身が、改めて目を開かされる思いをしたことを強く覚えている。その事を具体的に説明すれば、そのひとつは、これまで日本の市町村では不可能と言われてきた人口抑制策が、町田で初めて画期的な成功事例となったこと、もうひとつは、初めて地方から科学的、実証的な根拠を持って、中央政府の住宅政策の不備を指摘し、以後の住宅政策の改善検討を促したことの二点である。

特に人口増加の抑制では、それまでの各市町村の長期計画の基本の将来人口数値は、「計画」と言うよりも「推計」と呼ぶにふさわしい予想数値で各種の整備計画がなされて来たことを考えれば、町田市の白書の主張とそれに続く一連の施策が、確実に人口増加に歯止めをかけた事実は画期的な出来事だと言ってよいだろう。「団地白書」は、その他にも町田市政にさまざまな成果物をもたらしている。白書を作るほど住宅団地が多いのに、それまでは全て

年次	人口総数	増加人口	対前年増加率
昭和 33	60,957	—	—
34	63,050	2,093	3.4
35	66,228	3,178	5.0
36	71,640	5,412	8.2
37	78,893	7,253	10.1
38	87,326	8,433	10.7
39	96,891	9,565	11.0
40	105,484	8,593	8.9
41	116,842	11,358	10.8
42	126,270	9,428	8.1
43	134,082	7,812	6.2
44	159,268	25,186	18.8
45	182,411	23,143	14.5
46	206,677	24,266	13.3
47	220,929	14,252	6.9
48	229,991	9,062	4.1
49	240,021	10,030	4.4
50	247,506	7,485	3.1
51	254,980	7,474	3.2

昭和47年から増加率が確かに低下

の住宅団地の全情報が記載された町田市政の基本となるべき地図も一覧表も作成されていなかった。白書のプロジェクトチームでも、作業の当初からこの基本情報の不足に気付いて、先ずその整備に16人が足で集めて取り組んだものだったが、それ以後毎年のように新しい地図の改訂版が作られてきたのをみれば、この「団地分布図」がどれほど重要な資料として役立ったのかは明白である。

また、私自身のことになって恐縮だが、団地白書の作業では文章の取りまとめ作業に、いわゆるKJ法(※1)なる手法を初めて使うことを試みた。結果は成功したと言えるほど上手く使いこなせたとは思わなかったが、このKJ法の本質がより多くの人々の声の



本音をわかりやすく整理する手法として、大変優れたものの一つだと若い多くの職員に、少し理解してもらえる機会になったのではないかと自負している。

※1 文化人類学者・川喜田二郎氏（1920-2009年）が提唱した野外科学としての創造力開発と問題解決学整理法。私は団地白書作業が契機で個人的にもご指導をいただいた。本年8月に惜しくも他界される。

団地白書がもたらしたものの最後に、若手職員の能力開発と自己研鑽を促した効果について触れておかなければならないだろう。これは何といても先ず指導者の力量に負うところが大きいですが、もうひとつは作業テーマの素材のよさによる。向坂正男先生については既にご紹介したが、もう一人忘れてはならない人として森戸 哲さんの存在がある。

森戸さんは、プロジェクトチームが始まって1ヶ月後に、向坂先生が都市計画分野の専門家も必要だという理由で、友人の東大教授をお願いして来られた方で、当時は東京大学工学部・都市工学科の博士課程に在籍されていたと後で判った。



森戸氏と福士昌寿氏（右・経済企画庁課長）

私たちは、毎月1回ぐらい見える向坂先生に作業の全体の方向と修正を、週2回くらいこられる森戸さんから、都市政策上の具体的な問題把握や取り組みの視点や調査手法について指示を仰いだ。お二人は、町田市での出会いが初対面と伺ったが、まるで事前に全て打ち合わせ済みと思うくらい息はピッタリで、それだけでも驚かされることが多かったが、都市政策上のさまざまな問題に対する考え方や具体的な調査方法についての指摘も、これまで見たことも聞いたこともない視点が多く、それらの体験が後年、職員たちの仕事上でどんなに役立つことになったのかは計り知れない。

## ■集合住宅団地建設に歯止めをかけた宅地開発指導要綱

「団地白書」が完成して発刊される1ヶ月程前の9月に、大下市長は「町田市宅地開発指導要綱」(※2)を制定し公表した。これは団地白書が新市政の目玉として作業開始前からいろいろな場面で注目され報道もされてきたが、いかにも白書的な問題分析と整理だけで実質的な対策面では物足らなかった。大下市長は「問題は判った。では次にどんな手を打つ積もりか？」という質問の答えを併せて用意しておかなければ、折角の白書の効果は少ないと考えたのだろう。ここが大下氏の政治家として判断力の凄さだというところに、愚かにも私は後で気がついた。

※2 「宅地開発指導要綱」とは、地方自治体が集合住宅団地の建設を規制する目的で、独自に定めたもので、「条例」は市議会の議決が必要なのに比べ、「要綱」は市長の決断で制定できる条例より軽微な内規的なものとされる。従来までは「町田市宅地造成基準」があり、それを改訂して格上げした。

では、「町田市宅地開発指導要綱」の内容を簡単に紹介しておこう。

- ① 0.1ヘクタール以上の宅地開発を計画する事業主は、あらかじめ市長に申し出て公共、公益施設の設計、管理、費用負担等について協議し、審査を受けなければならない。
- ② 開発面積0.3ヘクタール以上の場合、中高層住宅は計画戸数1000戸につき1校の小学校用地、2000戸に1校の中学校用地を市に無償提供すること。
- ③ 開発面積の3%以上の公園緑地を設け、市に無償提供すること。
- ④ 区域内にある都市計画道路、上下水道施設は、事業主が整備し、市に無償提供すること。

などが主な内容で、これらに従わない事業主には、市は上水道の供給等の面で協力しない、というものだった。(実際に給水ストップをかけたことも起こっている)

このように、事業主に大幅な負担を強請する制度は法律的には何の根拠も無く、全国の自治体にもほとんど例をみない状態だったために大きな関心呼び、当時の建設省は全国に広がることを恐れ、市長の事情聴取を行い、さらには国会の特別委員会に証人喚問を行い、私も坂本課長と資料説明員として随行させられたのを懐かしく記憶している。

しかし前述したように、この要綱の威力は予期以上の効果を挙げ、少々の歳月を要したがそれまでの凄まじい人口急増には強力なブレーキがかかることとなった。

## ■長期計画の新しい理念、「考えながら歩くまち」づくりへ

このようにして全国の数多くの革新市長の中でも、僅か就任1年目にして一躍注目される数少ない幸運な首長の仲間入りを果たすこととなった大下市長は、団地白書チームの若いメンバーたち一人ひとりに暖かいねぎらいの言葉をかける暇もなく、すぐに三段ロケットの最終弾である「町田市の長期のまちづくり計画」の発射台に立ち上がった。

市長曰く、「これでもか、、、と建設される住宅団地の侵攻に歯止めをかけ、人口増加をストップさせて市財政への負担を軽くした上で、私なりのまちづくりの夢を描く。それが私の考えてきた構想だった」と、確かその時に初めて聞いたと記憶している。

翌1971年(昭和46年)の新年早々、町田市の長期計画策定の開始の号令がかかった。今度は、団地白書のチームをより一層拡大した職員総参加で計画づくりにとりかかると方針が決められた。つまり、とりあえず各課から誰でもよい、最低1名の計画策定委員を選出して参加させるというのが原則だった。計画作りの指導は白書づくりに引き続いて、向坂正男先生に市長から懇請がなされた。

私は団地白書以後、密かに「こんな欲の深い、薄情な市長との仕事はご免だ」と自ら「お役目御免」の辞表を懐に過ごしていたが、再び計画策定担当の辞令を受ける羽目になった。私には大下市長の満足する計画を作る自信はまったく無かった。前青山市長の時に、自分なりに心血を注いだ「70年プラン」に、就任した大下市長は一瞥もくれず「根無し草」と酷評して、その計画を全てお蔵入りに葬ってしまったからだ。(次号へ)

## ごみフェスタ 2009 みどころダイジェスト

### ハチドリ教室——黒津一子さんとその仲間たち

黒津さんたちがステージ上でハチドリ教室の準備を進めているとき、筆者の目の前を横切った



ハチドリ教室のブースでの紙芝居の実演

小学3年生くらいの女の子ふたりの会話が入ってきました。「あー、この教室、前にうちの学校にも来たよ！」黒津一子さんたちのハチドリ教室は昨年から精力的に町田市内の小学校をまわっています。ステージでの黒津さんは、来場者の反応をよく掴んだパフォーマンスをみせ、ちょっとしたハプニングも笑いにつながり、生き生きとした教室でした。

終了後、黒津さんにお話をうかがったところ、ごみフェスタでのハチドリ教室は今回で3回目。小学校で

は30回、のべ1400人の前でハチドリの話をしたそうです。黒津さんの話ではプラのレジ袋が無料だった時代を知らない子どもたちがいるとのこと。筆者(27歳)も小学生の頃はプラのレジ袋無料は当然で、環境教育もこれほど浸透していませんでした。現在、黒津さんは自分と同じ内容のハチドリ教室をおこなえる仲間を育成中です。ハチドリ教室はますます広がっていきそうです。

### 桜美林大学環境サークルエコレジのみなさん



エコレジ特製エコパック

現在1年生と4年生で構成されているエコレジも発足2年目。レジ袋の環境負荷をうったえ、大学生協との連携で学生公募デザインによるおしゃれなエコバッグの販売も実施しました。エコレジは着実に活動を続け、学生の反応も手ごたえを感じ始めているとのこと。また、生協の職員さんやパートの皆さんからも、好意的な協力が得られることがありがたいことです、と副代表で渉外係を担当

する渡邊恵さん(1年生)がお話ししてくれました。今までは学内でのレジ袋利用削減に焦点を絞って活動してきましたが、10月末に開催の桜美林大学の学園祭終了後、次の活動の展開について、あらためて方針を話し合う予定とのこと。

### 556クラブ——小泉勝市さんの「パッキー」実演



小泉勝市さんが主宰する556クラブのブースでは、牛乳パックを加工した建築資材「パッキー」

(商標登録済)の製作実演をしていました。会場では、この「パッキー」で作られたお神輿も展示されていました。



「パッキー」の考案者、小泉さん

(文責：編集担当補佐 向谷有加)



## 雨の茶の花忌——詩人、八木重吉の命日に相原を訪ねました

向谷 有加



町田ゆかりの文学者といえ、昨今は鶴川の武相荘に住まっていた白洲次郎、正子が全国的に脚光をあびているのでしょうか。他にも、遠藤周作、八木義徳など枚挙にいとまがありませんが、生粋の町田生まれの詩人といえ八木重吉です。今回の町田相原への取材は、10月26日月曜日に行われた八木重吉の追悼忌を訪れました。

1898年、堺村に生まれ、結核により30歳弱の生涯を閉じた八木重吉。その短い生涯の中で本格的に詩作した期間は6年ほどと言われていますが、1600篇におよぶ作品を残し、教科書にも載っている彼の詩は、誰もが一度は目にしたことがあるでしょう。一見平易な詩の読みやすさの根底に貫かれているのはキリスト教の教えであり、それがあつた種の高潔さを湛えています。

茶の花忌主催の八木藤雄氏は、重吉の甥御さんにあたります。相原でご家業を続けながら、叔父にあたる八木重吉研究も両立され、1984年には私設の八木重吉記念館を設立されました。藤雄氏によれば、長年続けていた茶の花忌も、ご本人の体調不良などが重なり、やむなく去年で終了させるつもりだったとのことですが、今年に入り体調も持ち直し、命日には必ずこの重吉の生家と墓前を訪れてくれる方々への感謝の思いを込めて、茶の花忌再開を決断したそうです。今後も茶の花忌を続けていくという思いもこめ、今年は特別に案内状を作成し、いつもきてくださる方々にお送りしたそうです。



茶の花忌の案内状

### 主催者の開会のあいさつと墓前参り



この日は台風接近中の大雨。それでも開会1時間ほど前からしずしずと人は集まり、会が始まる頃には90名ほどの人が、重吉の生家に集っていました。集う人々の会話に耳を澄ませていると、水戸から、千葉から、あるいはもっと遠方から足を運ばれてきた人もいらっしやる様子です。もう何十年とかかさず、茶の花忌へ足を運ばれているらしい人たちの静かな世間話を聞くと、もなしにうかがっていると、この夭逝の詩人を偲ぶ誠実な愛情が、雨の会場を相原取材のご縁で同席する筆者の胸にもしみじみと伝わってきました。



主催者、八木藤雄氏の司会挨拶の後、さっそく八木重吉の生家の道路向かいのお墓へお参りに向かいます。ここでは重吉愛唱の賛美歌322を合唱し、その後めいめいが静かに重吉とその妻子の墓前に祈りを捧げました。その間、主催者の藤雄氏はひとりひとりに丁寧に挨拶をされました。

### 参列者の方々の挨拶



重吉の詩に曲をつけ独唱する

奈良操氏

墓前へのお参りのあとは重吉生家前での会場で、藤雄氏の挨拶、小川聖子氏による重吉の詩の朗読ののち、日蓮宗尾崎文英氏、臨済宗柳瀬寛洲氏、町田市教育委員長など歴任された井上恭一氏がスピーチをされました。三人三様、重吉の詩が持つ魅力を語られ、それぞれの人生に重吉の作品がどのように寄り添っていたのかを語られました。重吉の詩の底にあるものは先述したようにキリスト教への信仰とのことですが、読み手は重吉の詩に人生のいつ



挨拶文を読む主催の八木藤雄氏

の時代にも寄り添いうる、宗教を超えた暖かみと気高さを感じ取り、大事に愛唱していることが強く伝わってくるスピーチでした。その後、尾崎操氏の重吉の詩の独唱に、会場のひとびとは静かに耳を傾けました。

### 会の終了後

13時から始まった茶の花忌は16時過ぎに閉会となりました。前半の粛々とした雰囲気とは一転、茶の花忌の後半は音楽を楽しみつつ和やかな時間が流れました。会の休憩中にふるまわれたのは煮物とお赤飯、おまんじゅうにお茶。このもてなしは雨空の下の参会者の体を温めてくれ、また煮物の味に舌鼓を打っていました。そのお料理の準備、またほかの雑務をなにくれとなく手伝っていらした相原の奥さんたちは「去年よりたくさんみなさん召しあがってくださったわねえ」と、茶の花忌に集った人の多さに声を弾ませていました。

### 終わりに

筆者は散会后、土蔵を利用して造られた八木重吉記念館に入っていき若い男性を見かけました。若いひとの参加は珍しかったのでその方に声をかけ、お話をうかがうことができました。横浜からやってきたというその方は30歳、最近、身近なひとを立て続けに亡くされたとき、本屋で偶然手にした八木重吉の詩が胸に響いたそうです。「にわかファンで、気後れしたんですけど、来てしまいました」と含羞を見せながら言葉少なに話してくださり、その後熱心に記念館を見学されていました。

主催の八木藤雄氏は茶の花忌の直前にお会いしたとき「この相原の山の中にひっそりと、彼の命の灯を燈していきたいのです」とおっしゃいました。スピーチをされた井上氏は、そのお話の中で「町田市において八木重吉の名が必ずしも浸透していないのはまことに残念です」と語られていました。しかしながら相原に詩人八木重吉が誕生したことを確認しつづける場所となる茶の花忌は、さきに紹介した男性のような愛読者が足を運び続ける限り、なくならないでしょう。茶の花忌の開催を手伝う人々も、異口同音に「八木の親族を中心に茶の花忌を続けてきたが、今後はもっと地元の方々八木重吉を分かち合いたい」と、来年以降の茶の花忌への思いを語ってくださいました。

2009年10月26日、重吉没後82年はあいにくの大雨。大雨にもかかわらず90名近い八木重吉を偲ぶひとびとが相原の記念館に集まりました。「雨の好きだったひとだからねえ」という参会者どうしの会話が筆者の耳に入りました。重吉の生家の土蔵を利用した記念館に、重吉の素朴な筆跡で、このような詩を見つけました。

#### 雨

雨のおとがきこえる

雨がふっていたのだ

あのおとのように そっと世のためにはたらいていよう

#### 雨

窓をあけて雨をみていると

なんにも要らないから

こうしておだやかなきもちでいたいとおもう

八木重吉記念館（見学要予約）042-783-1877

〒194-0211 町田市相原町4473番地 八木重吉記念館

## 事務局だより

定例会のおしらせ

- ・12月の定例会は12月2日(水曜日)です。  
中央公民館ロビー 13:00～

※ 前号の事務局だよりにて、11月の定例会は11月4日(水曜日) 中央公民館 学習室(3) 18:00からとお知らせをしておりましたが、13:00から公民館のロビーにておこなうことになりました。連続して直前の変更となりましたこと、かさねてご了承のほどよろしくお願ひ申し上げます。なお、今後しばらく定例会は原則として、毎月第一水曜日の13:00に公民館のロビーにて開催を予定しています。

### 玉川学園ギャラリーウォーク 2009 開催中

毎年恒例となっています玉川学園駅周辺でのギャラリーウォーク。今年は11月1日(日)から15日(日)まで開催しています。当地在住の大橋会員からの情報によると、「今年は地域の80周年ということもあり、3丁目のこども広場では小野路で製作している石彫のグループの野外展示と玉川大彫刻・陶磁の学生有志の作品も液編め花壇や拙宅駐車場(普段から空いてます)や数軒の家の前等に展示しています」とのことです。玉川学園の駅改札口のパンフレット置き場にギャラリーウォークのマップが置かれているそうですので、そのマップを見ながら秋の玉川学園を散策してみるのはいかがでしょうか。

### 町田市農業祭「太陽と緑のまつり」は今月です

こちらも毎年恒例となっています町田市農業祭、太陽と緑のまつり 2009。今年は11月14日(土)～15日(日)に午前9時～午後3時でおこなわれます。会場は例年通り町田市立野津田公園です。名物の野菜でできた宝船の展示とその野菜の即売も太陽と緑のまつりの魅力です。こちらもぜひ、足を運んでみてはいかがでしょうか。

## 編集後記

今月号は前号の編集後記で予告のとおり、ごみフェスタ 2009 の模様を巻頭でご紹介しました。桜美林大学の環境サークル「エコレジ」の活動は、この『まちづくりの環』でも継続して取材してきましたが、今年度の新入生たちがもうすっかり中心メンバーとして活躍している様子に驚きつつ、またとても頼もしく感じました。そのエコレジは10月29日(木)～31日(土)でおこなわれた桜美林大学の学園祭にも出店しました。



事務局長の長期連載「ふるさとづくり50年・私の幻燈譜」もついに10回の連載を数え、いよいよ町田の秘史と呼ぶにふさわしい内容に一層入ってきています。この連載をお読みいただければ、いかに町田市が戦後日本の郊外の歴史において特異な位置を占め、先駆的な試みをおこなってきたかがおわかりいただけるものと思います。まさにその当事者の手によって、今後とも大河ドラマのような大きな歴史のうねりが描かれることうけあいです。ということで、どうぞ今後とも『まちづくりの環』をご愛読くださいますよう、みなさまお願ひいたします(H. I.)。

## まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報  
2009年11月4日第75号発行  
発行者 佐藤東洋士  
編集責任者 井上弘貴  
事務局 常盤町桜美林大学内  
TEL 042-797-6947  
E-mail hiro\_inouye@yahoo.co.jp